



ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006303

ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」について

塚 田 秀 雄

I はじめに

「ハンブルグ教会大司教列伝」と「北欧諸島誌」 本稿で検討するブレーメンのアダムの「北欧諸島誌」は「ハンブルグ教会大司教列伝」全四巻中の第四巻にあたる。その一、二巻はこの大司教管内の各司教管区の歴史、三巻はこの書の執筆を命じた大司教アーダルベルトの伝記である。一、二、三各巻の内容は11世紀当時、半ばキリスト教化され半ば異教のままに残っていたヴァイキング時代末期の北欧での布教活動の歴史であり、地域文化の接触、変容の過程を示していると理解されるから、そのような観点からする地域観は十分汲み取れるものではあるが、地域そのものを記述の対象にしようとするものではない。これに対し、第四巻は原題が「北の諸島に関する記述」となっていることから明らかなように、地域の状況を可能な限り総合的に捉えようとするもので、歴史的地理的資料としての価値が非常に高いと考えられる。当時キリスト教か異教かということはいわば絶対的な判断の基準であったと言えるが、「北の諸島」として取り上げることで、この基準を否定しないまでも、キリスト教徒と異教徒が混在する地域を、安定したキリスト教圏の外郭に位置する一つのまとまりとして捉えている点で、この第四巻は新鮮である。

「ハンブルグ教会大司教列伝」は、アーダルベルトを継いだ大司教リーマルがアダムの原著に加筆して、1073～75年の間に成立したと考えられ、本文欄外に記入された注はアダム自身によるものと後年の加筆によるものがあると考証されている。数種の異本があるが、その書誌学的検討は筆者の能力を超えているので行わない⁽¹⁾。

底本としたのは全四巻のスウェーデン語訳であるが、必要に応じて第四巻のみのラテン・デンマーク語対訳を参照した⁽²⁾。

ブレーメンのアダム ブレーメンのアダムについては多くは知られていないが、もともと南または中部ドイツに住んでいたフランク人で、1066年か1067年にブレーメンに来住し、大教会の修道会員ならびに教会学校の教師となったことが推測されている⁽³⁾。

アダムがこの時代のもっとも重要な北欧の地理的記載者たり得たのは、自らもデンマークに旅し、デンマーク王スヴェン・エストリドソンから重要な情報を収集したほか、北欧を部分的に熟知する商人、船乗り、伝道僧などから得た情報を整理したことによる⁽⁴⁾。

アダムがラテン語に優れていたことは、古代以降同時代までの著作をしきりに引用していることで明らかであるが、このことはアダムの著作に文献的な豊かさを保証すると同時に制約を加えることになると考えられる。「北欧諸島誌」の第一章は「デンマーク人の土地は聖アンス

ガル伝に書かれているとおり、ほとんどが島から成っている。エイダー川がわが国民北アルピング人とデンマークを隔てている」という文章で始まっている。この書きだしがローマ時代の古典と同じであることは、例えば、ガリア戦記やゲルマーニアの冒頭部分を読み比べれば明らかであるから、アダムが文章の形式まで古典に則ったことが知られる⁽⁶⁾。また北の諸島 *Insula Aquilonis*⁽⁶⁾ として北欧を捉えているのも、ローマ人の伝統的理解を継承するものである。文献よりも自分が集めた資料を重要視したふしはあるが、信頼すべき情報もたらされる範囲外では、慎重な言い回しながら荒唐無稽な文献の記載を引用することになる。その結果、その後正しいと証明される事実の先駆的な記載が注目される一方で、でたらめが散見されることとなるのである。

アダムがこの北欧布教史に関する書を著したのは、大司教アーダルベルトの命によったということもアダムの記載を方向付けており、キリスト教が絶対的なありかたとする考えにゆるぎない。そのため、本文中にはアーダルベルトと教皇の対立や教会組織内の権力闘争を窺わせる記述が多く、キリスト教会組織についての記載は批判的な部分を含むものの、全てが客観的であるとは言い難い。

目的と方法 本稿の目的はブレーメンのアダムが北欧をどのように捉えていたかを明らかにすることである。そのために次の諸点について検討する。①アダムは地域に関わる概念をどのように表現しているか、②アダムの記載に基づいてどのような地図が描かれるか、③アダムの地域記載はどのような構造を示すか。

このような問題を考えることによって、精度の差はあれ、いわば北欧の体系的記載として各時代を代表する、古代ローマ人であったタキツス、中世のフランク人たるブレーメンのアダムそして近代初頭のスウェーデン人であったオラウス・マグヌスの各著作の時代による発展の跡をたどり、著者の属性ならびに時代の違いによる地域観の違いを探る資料が得られると考える。

II アダムが用いた概念

地域と集落に関する用語 「ハンブルグ教会大司教列伝」では地域の固有名詞にその地域の属性を示す普通名詞が付されて用いられる場合が多い。その土地についてのアダムの考えが示されて都合がよい一方で、用語の概念の不明確さや用法の不統一のために解釈が定まらない場合も少なくない。ここでは自然地形を示す語を除き、地域や集落に関するいくつかの語の意味と用法について検討してみたい。()内の数字は「北欧諸島誌」中の章を示す。以下、ラテン語原句と日本語訳を例示する。

- (4) *regioni, quae Iudland dicitur* ユランと呼ばれる地方
- (8) *In eadem regione Sconia* スコーネそのものには
- (7) *sconia est pulcherrima visu Daniae provincia* スコーネはデンマークでもっとも美しい州
- (31) *Nortmannia sicut ultima orbis provincia* ノルトラントは世界でもっとも隔たった位置にある土地なので

スウェーデン語訳では、*regioni*(4),(8)は共に *landskap* とされているが、*provincia* (7)は *provins*、*provincia* (31)は単に *land* としている。またデンマーク語訳では、*regioni* (4)は、*landsdel* とするが、*regioni* (8)では訳語を付さず単にスコーネとしており、*provincia* は *landsdel* (7)、*land* (31)としている。以上の用例にみるこれら二つの語は非常に曖昧な意味で使われており、これは他の場合も同様である。どちらかと言えば、より限定された意味をもつと思われる *provincia* でも、特に州などと訳すべき行政的な意味を持たない場合が多い。

一般的な都市を示す言葉は *civitas* であるが、下記二例では *civitas* はかなり大きい地方名であり都市とは考えられない。

(24) *civitas eorum naxima Halsingland* そこで最大の *civitas* ヘルシングランド

(33) *Wig, civitatem Nortmannorum* ノルウェーの *civitas* ヴィーケン

伝聞によって地方名を都市名と誤解したために *civitas* の語を用いた可能性があるが、(24)の場合はスクリードフィン人の、(33)の場合はノルウェー人の中心的な地方の意味で用いているのかもしれない。

次に都市について用いられる *civitas*, *metropolis*, *urbs*, *oppidum*, *metropolis civitas* 等についてその意味と用例を検討する。

まず、*civitas* については、トゥーレ・ニーベルィが考証しているが⁽⁷⁾、「北欧諸島誌」に記載される都市で *civitas* とされるのは、Oldenburg, Mecklenburg, Ratseburg, Demmin, Rethra, Jumne, Odense, Roskilde, Lund, Skara, Sigtuna, Skalholt, Ribe, Hedeby, Århus 等であり、それぞれの代表的な属性は地方的中心、王の居所、司教座等さまざまであるから、これは都市についてのもっとも一般的な呼称といえる。*civitas* はカール大帝時代から12世紀までは司教座あるいは都市の内部でも特に教会関係者が集住した部分の呼称であったと言われるから、アダムはこの語の意味を拡大して都市一般の意味で用いていることになる。

異教的なヴァイキングの中心都市であったビルカについては、これを形容する名詞なしにそのまま単独で示されている(14,17)か *metropolis* の語をあてている(20)が、筆者未見の第一巻のラテン語原文では、*oppidum* の語を用いているという(I-15,60,62)。第一巻の場合はスウェーデン語訳で見ると、*oppidum* は世俗的な中心の意味で *staden* と訳されている。ビルカへの司教の任命によってこの都市が宗教的機能を併せ持つことになって *metropolis* の語があてられたとするのがニーベルィの説である⁽⁸⁾。

トロンネイムについて *metropolis civitas* (33)とする例があるが、ニーベルィはこの集落が *metropolis* が本来意味する大司教区の中心ではないから、*metropolis* はこの場合、ハンブルグやブレーメンの場合と異なって世俗的な大都市を意味すると言うが、トロンネイムも司教座ではあったのであるから、本来の意味にこだわって世俗的な大都市とのみ解釈するのは誤りであると筆者は考える。ニーベルィも、ビルカの場合には *metropolis* の意味をより柔軟に司教座と解釈しているのであるから、トロンネイムは世俗的機能と宗教的機能を併せた都市として *metropolis civitas* と表現させた数少ない例と理解するのが適当であろう。

以上のごとくアダムの、地名に伴う属性記載の方法は一貫性を欠くきらいがある。大きい地方名について言えば、ローマ的あるいはフランク的な行政組織の呼称をそのようなものがない

北欧に適用したことがある。都市について言えば、アダムは都市が本来有する総合的な機能や歴史的経緯を軽視した訳ではないが、各都市の性格を分類するのに宗教的な観点を重視したために混乱を生じたと筆者は考える。これはこの書の目的、著者の立場に起因する制約の現われである。

民族と国の呼称 11世紀半ばの北欧は、ヴァイキング時代の末期で、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの三国が既に成立していたと言われる⁽⁹⁾。「北欧諸島誌」にはこれらの国名や民族名に相当する語が頻繁に用いられており、ラテン語の常として地域名を民族名に対応させて表記するのが一般であるが、これは時に混乱を招くことがある。以下に重要な表記の例を挙げる。

Nortmanni——Nortmannia ノルウェー人、北欧に住む人——ノルウェー

Nortmanni はノルウェー人という狭義で用いられる場合、北欧に住む人間として広義で用いられる場合、更に、民族移動でシシリーに定住したゴート人、ヴァイキングの定住活動によるノルマンディーのいわゆるノルマン人を意味する場合がある。

Sueones——Sueonia スヴェア人——スヴェア人の土地

Suedi——Suedia “ —— “

Sueones はタキツスのゲルマーニアでいう Suiones であるが、アダムの時代にはタキツスのゲルマーニアは未だ知られていなかったと言われる⁽¹⁰⁾。Sueones と Suedi が共に用いられており、この間に意味の違いがない。スウェーデン語訳では Sverige スウェーデン、svenskar スウェーデン人としているが、この語は Gothi との関係で検討を要する。

Goth——Gothia ゴート人——ゴート人の土地、イエートランド

ゴート人は現在のスウェーデン語では、イエート人と表記すべきものである。アダムは I-60 で、ビルカについて「スウェオネース人の土地の中央に位置するイエート人の町である」と記し、イエートがスウェオネースに包含される表現をしている。I-61では「アンスガルの使節団がスウェオネース人とイエートの土地を訪ねた」とこの両者を並立する民族として扱っている。筆者はこれを用法の混乱とは考えない。何故なら、現在のスウェーデンの国名 Sverige スヴェリエは svears rik スヴェア人の国でありながら、イエートを包含する形になっており、イエートとスヴェア人は元来並立していたものが、後者の主導下に統合が進んだとされることと符合するからである⁽¹¹⁾。

Dani——Dania デーン人の土地、デンマーク

Dani はその意味がもっとも明確でデンマーク人の意味であるが、その支配領域または居住領域である Dania は同然、現在のスウェーデンに属するスコーネを含んでいる。

以上のことから、デンマークについてはその範囲もはっきりしているのだから、デンマークという表現が妥当であるが、スウェーデン、ノルウェーについては現在の両国に厳密に妥当する言葉はない。これは国をある民族が住む地域として表現することが現在の国名表記とは必ずしも符合しないこと、ならびにこれらの国についてはデンマークについてほど情報が多くなくその信頼度も低かったことに原因があると考えられる。

Sclavi スラヴ人、Scythae スキチア人その他の呼称も類出するがここでは省略する。

Barbari、Pagan、Cives アダムは民族あるいは地域を区分するのに、Barbari と Cives ならびに Pagan の語を用いることが多い。Pagan 異教という語についてはあまり問題はなく、我々の通常の理解通り、非キリスト教的なものについてこの語を用いている。しかし、対立する二つの概念である Barbari と Cives、とりわけ前者についてはその概念の検討が必要であると考えられる。これについては、Allan A. Lund⁽¹²⁾ と Tore Nyberg⁽¹³⁾ が考察している。Barbari はギリシャ人にとって理解困難な言語をはなすギリシャ人以外の民族を意味して差別的な語ではなかったのが、まもなく、原始的で、文明化されたギリシャ・ローマ的なもの以外は Barbari とされたのに対し、中世ヨーロッパでは、barbari は Pagan と同義とされるに至ったことは一般に認められている。ここでは、便宜的にそれぞれ、蛮人ならびに異教徒およびそれらの形容詞として考察を進めることとする。

アダムはウプサラについて、異教の寺院を野蛮な信仰の中心と位置付け(30)、異教と野蛮を同義であるかのように用いる一方で、既にキリスト教化されているデンマークとノルウェーの民衆について、野蛮な人々は十分の一税を払わないと述べており(15)、この場合、野蛮という語は古代と同じ用法である。またボルンホルム島について、蛮人の土地やギリシャ正教を信ずる土地へ航海する舟にとってよい港であると言うが、この場合の蛮人が異教徒とは異なる意味で用いられているのは明らかである。ルンドはこれを整理して、アダムは barbari の語を ① 異教徒、② 非古典世界に住む民族の両義で用いるが、遅れて古典文化を受け入れたが既に安定的に文明化された国としてフランス、イングランド、ドイツは ② から除外しているとする⁽¹⁴⁾。ニーベルヒはこの区分を統合するごとく、barbari の語は住民の一部はキリスト教化されていても全体としては文明化されていない、神聖ローマ帝国の境域外の民族を意味していると理解している⁽¹⁵⁾。アダムにとっては、キリスト教とその支配機構としての封建制度を持つ国が文明化された世界であり、その住民が cives であることになる。しかし、アダムはこの cives が必ずしも barbari に比べて常に優れているとするわけではなく、例えば、当然、barbari であるスイオネースに関して、その信義、他人に対する友好的な態度、民主的な社会についてこれを称賛している(21,22)のは、「ゲルマーニア」でタキツスがゲルマン人の健全さをローマ社会の墮落ぶりと対比させているのに通ずる⁽¹⁶⁾。言われるようにアダムが「ゲルマーニア」を知らないとすれば、千年を隔てたこの共通性は興味深いものがある。アダムは barbari を称揚する一方でキリスト教内部の腐敗、墮落について言及するが、基本的にはキリスト教に基づく文明社会とそれ以外の社会という構図はゆるがない。タキツスの場合はキリスト教が知られていないローマ文明の優越性を基準にしている。

北の諸島 アダムは当時知られた北欧とその周辺地域を叙述するのに北の諸島という語を用いているが、その内容は北欧の島に限らない。アダムは、バルと海が「西の海から東に向かって延びる内海である」とするアインハルト⁽¹⁷⁾を引用したうえで、「この海が一本の帯のようにスキチアの諸国を通してギリシャ正教の国まで延び、入口からロシアのノヴゴロドまで一ヶ月の航海を要するという従来の説をデンマークの族長ガムレ・ウォルフ等が確認した」(1)と記している。その上で兩岸の民族について述べているのであるから、アダムがバルト海を内海と考えていたことは疑いの余地がない⁽¹⁸⁾。しかし、半島という語を使っていないから、バルト海

内海説はスカンディナヴィア半島の認識とは直結しないのである。スカンディナヴィア半島が半島であるということをアダムが明確に認識していなかったか、島と半島とはアダムにとってたいした問題ではなかったのではないか。これはスカンディナヴィア半島の基部が確認されていないことの帰結である。上に引用した文章から見ても、アダムがいうバルト海は枝湾の一つであるフィンランド湾についての表現であって、ボスニア湾については言及していないことの意味は重要である。アダムが抱いたメンタル・マップでは、スカンディナヴィア半島は実際よりも大きい陸塊である可能性が大きい。逆にバルト海とフィンランド湾は東西に延びる幅の狭い内海であるから、この地域の水陸比は実際よりも陸の割合が大きいものであったと考えられる。ヘルシングランドという地名はボスニア湾の存在と不可分であるのに、アダムはヘルシングランドその他の現在ボスニア湾西岸に比定される地域について記しながら、ボスニア湾について何らの記載も残さないことは矛盾していると言ってよい。古代ローマはあるいは中世ヨーロッパの地図が情報の不足や宗教的固定観念のために正確なものになり得なかったのは致し方ないとしても、アダムはスカンディナヴィア半島の住民について記しながら、何故この地域を北の諸島として一括したのであろうか。その最大の理由は言うまでもなくボスニア湾についての地理的知識が不足していたことにあるが、このことは北欧が古代から永らく島嶼として扱われてきたことと無関係ではない。2世紀のプトレマイオスの地理書に記載された地名とそれに基づいて作成されたいわゆるプトレマイオス図では、ユトランド半島こそキムブリ半島として記されているが、スカンジナヴィアはスカンディアと呼ばれる島が唯一記されているのみである⁽¹⁹⁾。

アダムがバルト海を内海としながら、表題でスカンディナヴィアを島嶼としたのは、伝統的な表現に従ったと考えられる。彼の記述は「北欧諸島誌」第一章で、ドイツに接するユトランド半島からこの世界が始まるとしているが、もっとも精細な記載がみられるこの半島を含めて「島」としていることは、古典の表現に従っただけでなく、島も半島も彼にとってはたいした違いのないものであったことを示しているのかもしれない。

「スコーネはデンマークの最もはずれの位置にあり半島をなしている」(6)とする一方で、この章の補遺では「この島からロンゴバルド人やゴート人はその移動を開始した」として、スコーネを「島」としている。文面から、あるいはスカンディナヴィア半島全体が「島」であったかもしれない。半島はスウェーデン語で、*halvön* と訳されているが、原文のラテン語では、*fere insula* である。*fere insula* を *insula* に含めているのである。

1154年に出たイスラムの地理学者アル＝イドリーシーの「ロジェル王の書」の世界図は、シチリアを支配したノルマン王ロジェルII世がヨーロッパ各地の資料収集の後に描かせたものであるに関わらず、ノルマンの出身地スカンディナヴィアはユトランドとみなされるものも含めて数個の島が示されているに過ぎない⁽²⁰⁾。イドリーシーの地図はアダムも言及しているノルマン人⁽²¹⁾が関与しているにも関わらず、80年前にアダムが内海としているバルト海を取り囲むはずのスカンディナヴィア半島またはこれに相当する陸塊を記載していない。アダムの記載はイドリーシーの記載に影響していないのである。

スカンディナヴィア半島が初めて半島として描かれたのは1492年のウルム版プレトマイオス図であるから⁽²²⁾、アダム以後400年以上たって、ヨーロッパ地図は漸くスカンディナヴィアを

半島として表現したのである。

III アダムの記事方法

位置関係を示す記載 アダムが記載地名の位置関係をどのように表現しているかを検討するために、関係する部分を抜き出すこととする。各文頭の数字は章を意味する。sk)は欄外書き込みで、原著者によるものと後の誰かによるものがあると言われる。下線と?で問題のある部分を示した。

- 1) シュレスヴィヒまたはエイダー川からユラン半島を北へ進むとフューン島へ3日。オールボーへ5~7日。直進すれば舌状に細くなり、先端はヴェンデル。エイダーでもっとも幅が広い。オーヒュースから狭い水路でフューン島へ? シュレスヴィヒからは東方へ、リーベからは西方へ海路が通ずる。

sk99) リーベ——2昼夜——シクファル(フランドル)——1.5——プロール(イングランド)——1——サンマーシュ(ブルターニュ)——3——ヴァレ(サンチャゴ近く)——2——リスボン——3——ジブラルタル海峡——4——タラゴナ——1——バルセロナ——1——1——マルセイユ——メッシーナ——14——アッコ

sk102) オーヒュースとヴェンデルの間にヴィーボーの町がある。

- 2) エルベ河口の沖合にヘルゴランド島がある。8×4マイル大。
 - 4) フューン島はヴェンデルの隣にある? かなり大きい島で、ユランからフューン島へは真北へ?、フューンからシェラン島へは東に。シェランへはオーヒュースとフューンからはほぼ等距離。
 - 5) シェラン島は大きい島で南北2日、東西2日の行程。フューンと東のスコーネへ等距離、一昼夜? この島の西にオーヒュース、オールボーの町、ユランやヴェンデルがある? 北はノルウェー海、南にフューンとスラヴの入江?
 - 7) スコーネはシェラン島から近く、ヘルシングボリィは見える。スコーネはデンマークの端で、半島をなす。シェランの2倍の大きさ。イェータとの境は山と森。その他は海に囲まれる。
 - 10) バルト海は西から東に延びる内海。スキチアを通過して、ギリシャ正教の国まで。ブリタニア海をとりまいて東にデンマーク、その彼方にノルウェー? 西にイングランドがあり、南にはハンブルグ大司教区の一部であるフリースランド、ザクセンがある。北は海が広がるが左手にはオークニーやアイルランド右手にノルウェーの崖。北方遙かにアイスランドやグリーンランド。
- sk116) バルト海はローマ人のいうスキチアの湖に同じ。デンマークとノルウェーの間の西の大海から始まり。東に延びる。アインハルトによればその延長は不明。
- sk117) ヘルゴランドはイングランドからオール付きの船で3日。
- 11) デンマーク人によれば、バルト海の延長はノヴゴロドまで順風で1ヶ月。 幅は入口のヴェンデルとノルウェーの間で1昼夜の航海。どこでも100ローママイル以下。

- 16) バルト海の多くの島を記述。奥に進むとクールランドがありその長さは8日の行程。
- 17) 他に大きな島としてエストランド。クールランドに匹敵する大きさ。クヴィンノランドから近く、ビルカから遠くない。
- 18) 南岸ではフェンメルン島がオルデンブルクから見える。
- 20) ビルカはスィオネールの国の中央にあり、スラヴの町ユムネの真向かいで、バルト海沿岸の各地へ等距離。
- sk126) デンマークのスコーネからビルカまで5日の帆走。同様に、ビルカからロシアまで5日。？ スコーネからロシアまで10日か
- 21) ノルウェーは1ヶ月、スウェーデンは2ヶ月では通過できない。イエートランドの真ん中をリベア山地に発するイエータ川が流れる。
- sk131) イエータ川はイエートランドとノルウェーを隔てる。
- 23) ヴェステルイエートランドはデンマークのスコーネに接する。スコーネからイエートの大きい町、スカラまでは7日、そこからバルト海にそったビルカまではエステルイエートランドが広がる。
- 24) ノルウェーとスウェーデンの間にはヴェルムランド人、フィンヴェド人。この境界地帯の最北部にはスクリードフィン人が住む。中心はヘルシングランド？
- 25) スウェーデンの西部では、イエート人、スカラの町。北部では、ヴェルムランド人、スクリードフィン人が住み、ヘルシングランドが支配。南部ではバルト海がその全長に沿い、シグチューナの町がある。東方はリベア山地に接する。
- 26) シグチューナに近くウブサラがある。
- 29) シグチューナはウブサラから1日。スコーネからシグチューナまたは隣のビルカまで帆走5日。スコーネ→スカラ→テリェ→ビルカ→シグチューナは陸路1ヶ月。
- 31) ノルウェーはバルト海に突き出た岩山から始まり北に曲がって、大洋の岸辺を延びてリベア山地で終わる。
- 33) トロンネイムへ、オールボーまたはヴェンデル ___ 1 ___ ヴィーケン ___ 5 ___ トロンネイム。スコーネからの陸路もあるが危険で長途。
- 35) オークニー諸島からトロンネイムまで1日。イングランド、スコットランドへも1日（マルチニアヌス、ソリヌス）？
- 36) アイスランドへはブリタンニアから北へ航程6日（ピテアス）
- sk154) ブリタンニアからアイスランドまで航程9日。ここから凍った海まで1日。
- sk155) デンマークのオールボー岬からアイスランドまで航程30日？
- 37) グリーンランドはスウェーデンのリベア山地の正面？ ノルウェー海岸からはアイスランドと同様、帆走5～7日
- 38) ハログランドはノルウェーにより近い。
- sk159) ハログランドはスクリードフィン人の土地に近いノルウェー最遠の部分という者がある。
- 39) ヴィンランドについては北洋にある一連の島の一つと言うのみ。この島の向こうには通

過不可能な氷海。

40) ウェーザー河口から真北に航海すると、かたやブリタンニアを過ぎて、オークニーに到着、これを左にノルウェーを右に見て長い航海の後、アイスランドに。

距離の記載 アダムは極く限られた場合を除いて、距離を表現するのに絶対的な単位を用いない。アインハルトを引用した形で、バルト海の幅が100ローママイル以下である(11)、ビルカについての記述で、敵の侵入を防ぐために入江に100スタディール以上にわたって石の山を沈めた(I-60)、エルベ河口沖合のヘルゴランド島について、長さ8マイル弱、幅4マイルである(3)としているのがその例である。このビルカについての記載は文脈から見てリムベルトの聖アンスガル伝によることは疑い得ないところであり⁽²³⁾、またヘルゲランド島はフランク王国の地理的知識の範囲内である。これら3例で用いられた距離の単位は西欧のものであるが、西欧的な尺度がこの時代に既に北欧で用いられていたのではないことあるいはアダムの情報提供者がそのような距離表現法を知らなかったことは、その他の一般的な距離表現の方法からみて明らかであろう。西欧の尺度を用いたこれらの例が文献資料またはアダムの周辺で得られる情報によった記述であることを確認しておきたい。

「北欧諸島誌」で一般的な距離の表現は、海路、陸路共に所要日数によっている。陸路の場合、騎行か歩行かの区別がない。海路での所要日数の示し方はいくつかあり、単に所要日数のみを記す場合、帆走での所要日数とする場合、順風の条件を付す場合の他、一例のみ、オール付きの船で3日としたイングランドから先に挙げたヘルゲランドへの場合がある。いずれにしても北欧の地理に関する情報は少数の例外を除けば、距離についての単位を使った表現手段を欠いていたと言うべきである。アダムが文献以外でもっとも重要な情報源としたのは、デンマーク王スヴェン・エストリドソンからの聞き書きであり、21章でアダムは「——博識のデンマーク王が私に語った——」としてこれを示唆している。すなわち、デンマーク人等からの情報をそのまま収載すれば、そこには絶対的な距離の記載がなかったと解釈できる。

以上の距離の表現法の違いによって、各地域の情報が何に依存したかが推定でき、アダムは、ローマ以来の文献による資料とデンマークの王とその周辺から得た情報およびフランク王国の商人、航海者等から収集された情報をつなぎ併せていたと推定される。

方位の記載 位置関係の表現で距離と共に重要な要素である方位、方角については、前項で示した通り、東西南北の正方位で示される場合がほとんどで、八分割の中間方位が使われる例はわずかである。sk99で、リーベを出発して聖地に向かう旅程で、しきりに中間方位が示されているが、これは後日の記入であるとされており、「北欧諸島誌」が対象とする地域についての情報でもない。その他では16章で「——フューン島の南東には、既述のとおり、極めて肥沃な七つの小さい島がある。すなわちメーン、フェメルン、フェルスター、ロラン、ランゲランド等である——」というのが唯一の例である。この部分はハンブルグ・ブレーメン教会の人々にとって、北欧中もっともよく知られていたはずの地域で、デンマークを訪ねたアダム自身が自分の経験で語ることでできるところでもある。またスウェーデン語訳では、南東とされるが、デンマーク語訳では単に東とされている。原典では、euro であるが、この語義は(南)東となっており、即断はできないが単に東なのかもしれない。これら七つの島がフューン島の南東にあ

るというのは正しい。東または南というよりも南東というのが適切である。

アイスランドに伝えられる「エギルのサガ」は10世紀の英雄エギルが「北欧諸島誌」に関わる地域で活躍する物語であり、地名は非常に多く記載されているが⁽²⁵⁾、その中でも中間方位として表現すべき場合も正方位が用いられており、中間方位を示す語がヴァイキング時代には欠けていたのではないかと考えられる。

以上を併せ考えると、デンマーク人からの信頼すべき伝聞としてアダムが位置関係を語る時、中間方位による表現は在り得ない。しかし、実際に航海する時には、正方位以外の方向に関する知見を有していたからこそ遠隔の目的地に到達できたのであるが、その表現は4方位に限られたことになる。

この問題を現実解決の一つ方法は、単なる北とか東ではなく、真北とか真東といった表現が多いことであろう。また、「オークニー諸島を左に見て通過した後、ノルウェーを右に」(40)北へ進むといった表現は、不完全には見えても、航海者としては十分正確なメンタル・マップを有していたことを示している。

アダムが地球球体説を知っていたことは明らかであり(38)、太陽の軌道の高低を論じて回帰線という語も用いているが(36)、経度はともかく緯度によっても位置を表現しようとしていない。このことは、北欧諸地域の位置関係について、経緯度に関する知識を持たない者の情報を、ラテン的な知識で翻訳することなく伝えたことを意味しよう。同時に、アダム自身も未だ経緯度によって地球上の位置を表現する能力を欠いていたとも考えられる。

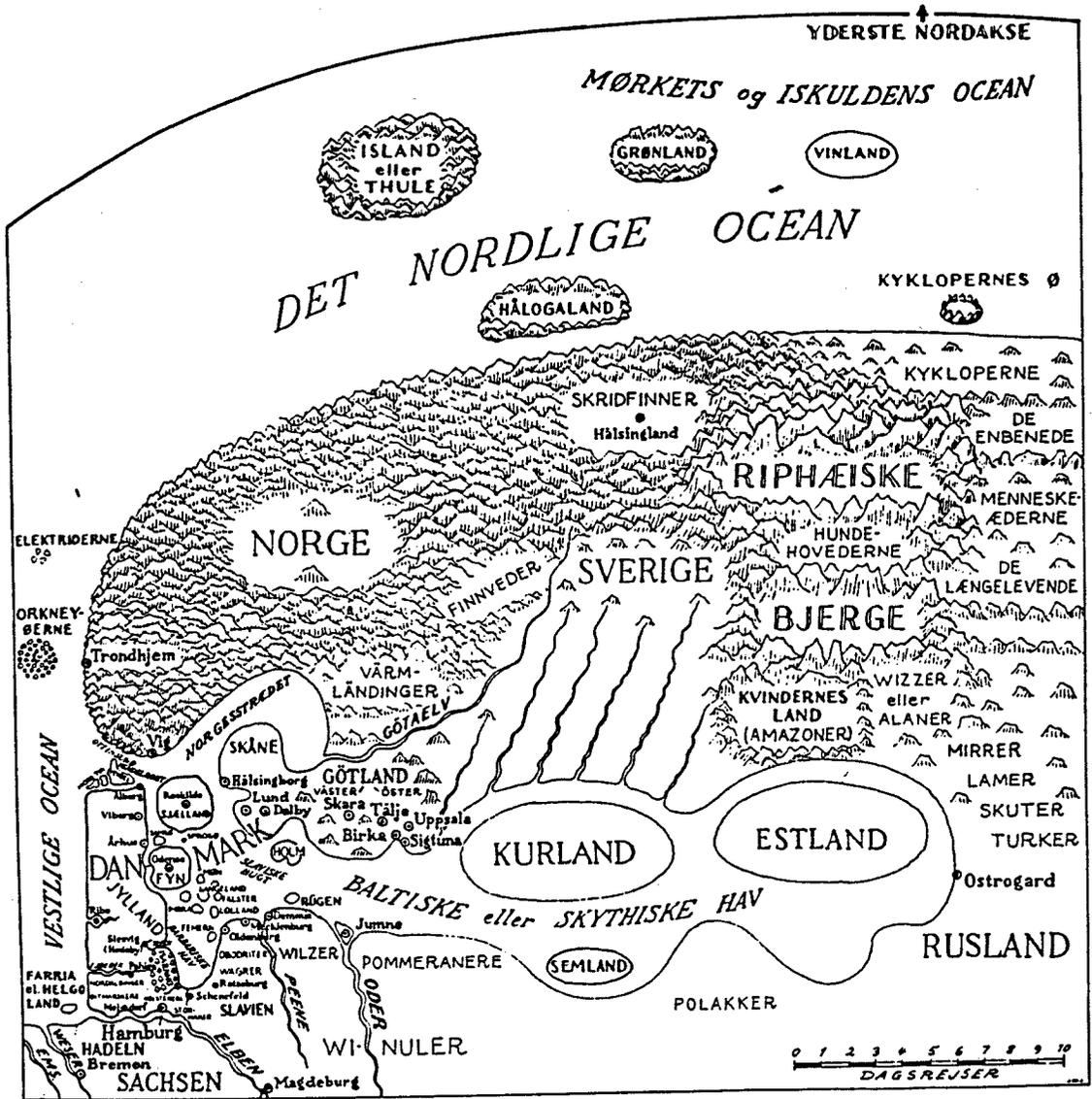
見方を変えれば、それまでのヨーロッパ世界にない新鮮な情報がそのまま伝えられたことに他ならない。表現方法は稚拙で——の近く、——と——の中間、——と——から等距離、——の彼方、——の真向かい、の正面、——の隣、右、左といった曖昧な表現が随所に用いられる。このような表現は、情報提供者そのものの表現と考えられる。

バルト海沿岸が未だ異教の世界に留まる部分が多かったのに対し、アダムは北大西洋の島々には当時既に布教の波が到達していたことを記しているが、プレーメンの伝道僧を北の海に運んだのは、早くにキリスト教化し、航海の能力をそなえたデンマークあるいはノルウェーの船乗り以外にはない。その情報は、カソリックの僧を経由したとしても、この海で暮らす者のものであり、アダムはこれを受け入れるしかなかったはずである。

アダムが記したことを基盤にできるだけ忠実に地図を描くことができたとすれば、それはアダムが理解しているものであると同時に、情報提供者が描いているものである。既存の知識に依存したアダムによる修正があるとしても、距離、方位の表現方法から考えて、当時の北欧人がもっていたメンタル・マップに近いものが現われると考えるものである。

アダムの記載の地図化 アダムの記載に従って地図を作成する試みは、既に1909年に、ビェルンボーによってなされており⁽²⁶⁾、ニーベルヒも部分的にこれを行っているが、アダムの記載自体にさまざまな問題があるために、現代の地図とはかなり違ったものになっている⁽²⁷⁾。地図化に際して次のような問題点があると考えられる。

1. 位置を示すのに、経緯度を全く使っていない。この点については既に述べた通り、回帰線の語を用い太陽の運行高度や白夜現象について言及しながら、アダム自身が球体説を十分に理



第一図 ビェルンボーがアダムの記載に基づいて描いた地図²⁷⁾

(・デンマーク語で表記されている。 ・これとは異なる地図の作成も可能である。)

解していなかったふしがある。それ以上に、経緯度の観測を全く行わない者からの情報に依存しているから正確な位置の表示は不可能である。

2. アダムの記事は距離に関して原則的に所要日数で、方位については正方位のみで表現している。従って、二つの地点の位置関係を漠然と相対的に示すのみで、その相対的な位置関係も厳密なものではありえない。しかし、高緯度地域であるから、中間方位を欠いても、正方位と補助的な表現である程度目的を達することができる。またA、B、Cの三地点の間で、A、Bの関係は間違っただけで表現されていても、B、C間は正しい場合があり得る。飛び石伝いに各石の間の相対的な位置関係を記しているという認識が必要である。

3. その他の形状については多くを記していないので、例えば島などはどのような形に表すか判断の材料を欠いている。実際に陸地の形状を測量に基づく地図なしに言葉だけで表現するのは不可能であり、例えば、アダムが、ユラン半島の形を北へ行くほどに舌のように幅がせばまるとしているのは(1)、これ以上は期待できない例外的に完全な表現というべきである。つまり、地理的知識の確度と文章による表現は一致しないのは当然であり、アダムの情報源であるデンマーク人が航海、陸行に支障ないだけ十分承知していた地理的情報も、地図的手段を持たなかったアダムが文章で表現しようとしてもできなかったものであると考える。

4. アダムの記事そのものに明らかな誤りまたは矛盾がある。例えば、バルト海の延長を知られていないと書いたり、順風でノヴゴロト⁽²⁸⁾まで30日と書いていたりする。またデンマークの島嶼というもっとも重要な部分について、シェラン島はフーン島から東へ(4)と書いた直後に、シェランの南にフーンがある(5)と書いたりする。

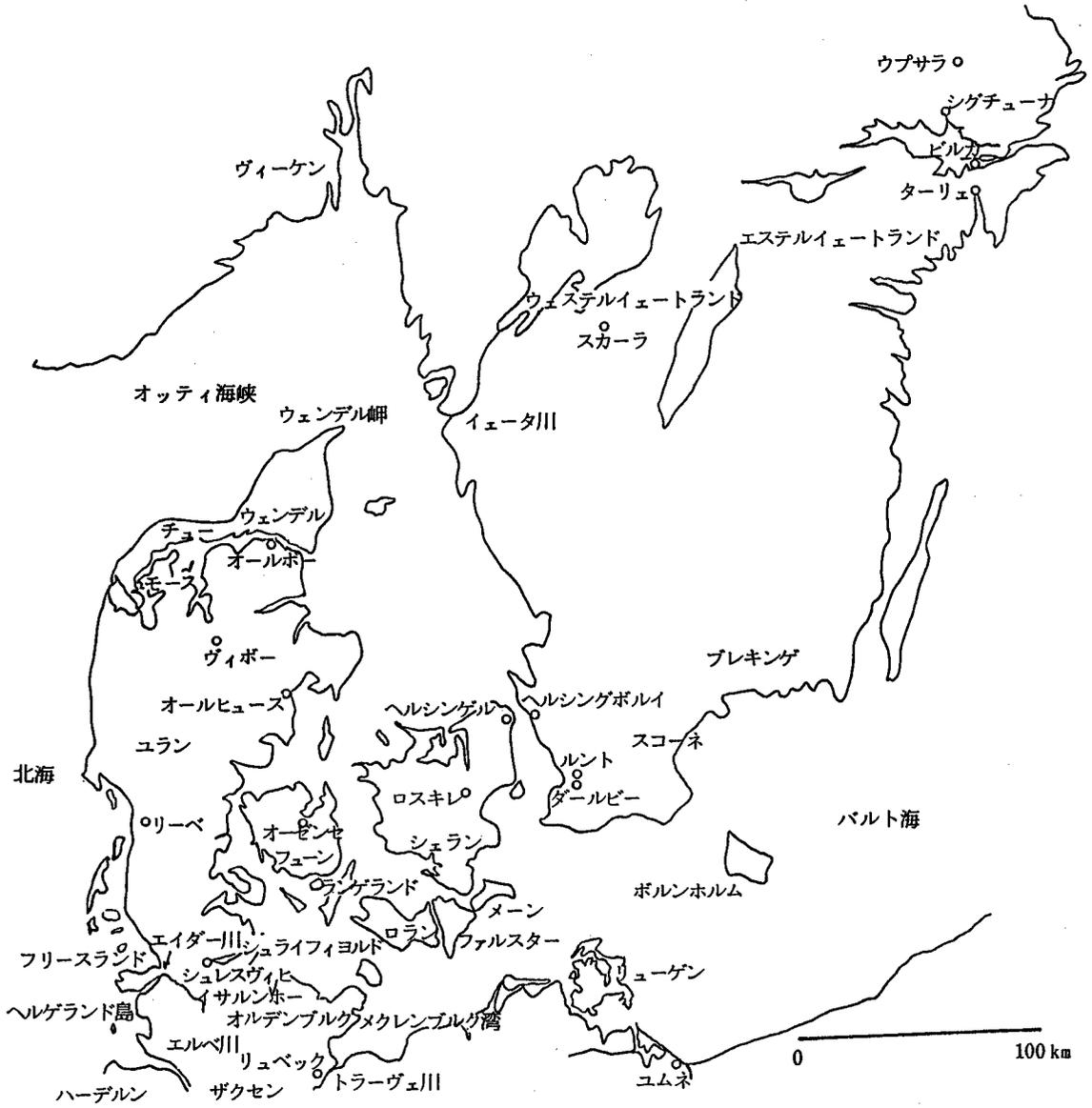
5. アダム自身がその確かさを信じていないと思わせるような記載もある。例えば、アマゾネスと犬頭族が住むクヴィンノランドについての記載はソリニスを引用しているが、章末では、それらはフランク人の信ずるところではないと一般論として否定している。これはアダム自身が、発音の類似から Kvämland を Kvinnoland と誤解して、ソリニスと結び付けたものである⁽²⁹⁾。

6. フランク王国の側に確実に知られている部分、デンマーク側の知識が確実な部分、航海者等により不分明ながらある程度の情報が得られる部分、北冥の彼方に隠れている部分等を縫ぎ併せた情報であるために、各情報間の整合性を地図上に具現するのが困難であると考えられる。**記載された地名** 表1はアダムが第4巻の「北欧諸島誌」に記載した地名を項目別、現在の国別に整理したものである。1～3巻ではこの他にドイツの地名が多く語られる。

自然地名については、デンマーク周辺の島についての記載が充実していることが一見して明らかである。別稿で検討するが、デンマーク領諸島に関する記載はその内容も具体的で正確である。現ドイツ領のフリージア諸島、Femarn や Rügen はドイツ側からの知識が及ぶ範囲であったから記載が正確であるのは当然である。しかし、バルト海中でもっとも重要な地理的位置を占め、考古学的にも古くからの海上交通の結節点であることが証明されているゴトランド Gotland の他、エーランド Oland やオーランド Åland など、それぞれ当然記載されるべき重要な島について何らの記載もない⁽³⁰⁾。逆に、Sembland, Kurland, Estland については、大陸の一部と考えられるにも関わらず、島として記載し、その内容は信頼度が低い。すなわち、ユトランド半島とスコーネの間にあるデンマークの諸島とバルト海南岸の一部の島についての

表1 「北欧諸島誌」に記載された地名・民族名

自然地名	
川	ドイツ Ejder. Elbe. Oder. Peene. Trava. Weser. スウェーデン Gothelba.
海	Östersjön = Baltiska- = vilda folkens- = Skytiska hav (バルト海) slaviska havs viken (メクレンブルク湾?) frisiska- = britanniska havet (北海) ishavet = (北極海?) norska havet (ノルウェー海) Ottinsund (スカゲラック海峡) ocean
島	ドイツ Farria = Helgeland = Fosetisland. Femarn. Rügen. デンマーク Falster. Fyn. Holm (Bornholm). Langeland. Lolland. Mors. Mön. Samsø. Sjælland. Thy. Vendel. (Als. Ärö. Täsinge.) バルト海周辺 Sembland. Kurland. Estland. 他 Ireland. Britannia. Skottland. Orkneyöar. Island. Grönland. Vinland. Halogaland. Thule. Elektriderna.
岬	デンマーク Darnernas udde. Ålborg = Vendel
湖	ドイツ Sli ?
森林地帯	ドイツ Isarnho
山地	ノルウェー・スウェーデン Riphea = ripheiska berget
人文地名	
地方名	デンマーク Jylland. 各島 ドンツ Frisland. Sachsen. Hadeln. スウェーデン Götaland. Hälsingland. Skåne. Västergötaland. Östergötaland.
都市	デンマーク Odense. Ribe. Roskilde. Viborg. Ålborg = Vendel. Århus. ドンツ Hedeby = Slesvig. Lubeck. Oldenburg. Jumne? スウェーデン Birka. Dalby. Hälsingborg. Hälsingland. Lund. Skara. Sigtuna. Tälje. Uppsala. ノルウェー Trondheim. Viken ? ロシア Novgorod.
国名	デンマーク ノルウェー スウェーデン ドイツ イギリス ギリシャ イングランド ロシア
民族・部族名	
	デンマーク Daner. Jutar. ノルウェー Nordmann. スウェーデン Finnvedingar. Sveoner. V.götar. Värmlänningar. Östgötar. blekingar. ドイツ sachsar. nordalbingar. スラヴ系 slaver. wilzer = sember. pomrar. polaner. ryssar. vinuler. raner = runer. liutizer. その他 skutar. turkar.
疑わしい民族名	バルト海北岸 amazoner. wizzer = alaner. mirrer. lamer. 犬頭族、長命族、食人族、その他



第二図 デンマーク、スウェーデンを中心としたアダムによる記載地名

み信頼するにたる情報が示されており、バルト海南部の情報は極めて乏しいのである。

これに対し、北大西洋のより遠隔の島々については、古典に頼った怪しげな記載がある一方でデンマーク王、スヴェン・エストリドソンの証言として、住民の生活についてうなずける記載があり、教会関係の資料からキリスト教の布教に関する情報をふくんでいる。なかでも、Vinland についての記載(39)はアイスランドサガ⁽³¹⁾以外では、この土地についての最初の言及であり、アダムが最新の情報を伝えたことが注目される。

その他の自然地名については、情報量はごく僅かと言わねばならない。

現ドイツの主要河川では Weser, Elbe, Oder の大河川が記載されているが、比較的小さい川であっても、Peene はハンブルグ大司教区の東端をなし、Ejder もデンマークとドイツの境界であるという重要性から特に記したものだろう。Trave については、スラヴの町 Lubeck に通ずるとしている(sk96)。アダムは I、II、III 巻で、ドイツの地名をかなり詳しく記載しているが、これに対し、IV 巻で対象とする北欧地域の河川としては、イエータ Göta 川を挙げるにすぎない。オスロ周辺に流入するグロムマ等の大河川、スウェーデンではダール川、バルト海南岸地域でもヴィスラ、ドヴィナ等が記載されても不思議ではないが、全く言及されていない。

山岳も同様であって、riphea の名のみはしばしば言及されるが、その内容は極めてあいまいで、おそらく大山脈、実際にはスカンディナヴィア山脈を指すと考えられても、それ以上のことは明らかでない⁽³²⁾。

湖については、シュライ Sli フィヨルドを湖と記す以外にまったく記載がなく、スウェーデンのヴェッテルン湖、イエータ川に付随して記されて当然のヴェーネルン湖についても触れられていない。

アイスランド、グリーンランド、オークニーその他の大西洋上の遠隔の島々についてより詳細に記述しているのは、キリスト教の布教と関係するが、その精度はデンマーク周辺に比して、はるかに小さい。

人文的な地名あるいは民族名とその内容については紙数の関係で別稿で検討するが、ドイツの一部について記載されている地名に比しても、北欧での地名記載は多くない。例えば、都市あるいはやや大きいと考えられる集落については、記載されているのは、ほとんどが司教座となっている集落である。当然、キリスト教化の早いデンマークと現スウェーデンの一部に集中している。その中で、ヴァイキング都市である Hedeby と Birka さらには Uppsala についての記載は注目される。

IV おわりに

アダムの記載の構造 アダムは「北欧諸島詩」を無秩序に構成したのではなく、次のような順番なりまとまりに従って記述している。

① ユラン半島、フューン半島とシェラン島、スコーネの順で述べられている。デンマークの中枢部だという認識が随所に見られる(9章まで)。

- ② ユラン半島の東に広がる内海としてのバルト海とその沿岸住民ちついて、南岸と北岸ならびに湾内の島嶼に分けて記述するが、一部には荒唐無稽な伝承をそのまま伝える部分がある（20章まで）。
- ③ スウェーデンについての情報は東西イェータランドから現ウプランドまで、特にビルカとウプサラについて詳細かつ正確であるが、その範囲外では急激に情報の質が低下する（30章まで）。
- ④ ノルウェーについての情報は海岸地帯に重点がおかれ、トロンネムについては比較的细节であるが、一般的にはスウェーデンの中部に比べると情報量が少ない（34章まで）。
- ⑤ ブリタニア海（北海、ノルウェー海）周辺の島嶼について簡単に紹介しているが、ローマ時代の文献に依存したものである（35章）。
- ⑥ アイスランド、グリーンランド、ヴィンランド等主としてヴァイキングの活動によって発見、植民された北西大西洋ならびにアメリカ大陸の一部について記しているが、ヴィンランドについて記載していることは特に注目される。（39章まで）。
- ⑦ 全体として内陸部についての情報は貧弱で、位置関係を示す資料としては、スウェーデンについてスカラを通してビルカとウプサラに達した場合以外、何の記録もない。当時の居住空間自体が海岸に留まって内陸には到達していなかったことが、ユラン半島についての記事などで示唆されているし、交通も海路が中心だったことがうかがわれる。

全体として、スカンディナヴィア半島という認識が希薄である。これは半島の基部または奥地についての情報が欠けていることによるのであろう。またバルト海特にその内奥部についての情報も極めて不確かであるのと関連している。特に、ボスニア湾の存在についてまったく触れていないことは、アメリカの記載で最大の弱点となっている。ボルンホルムについての情報が示されており、スウェーデン中部のバルト海岸に近いビルカやウプサラについて詳細な記載があるのであるから、ゴトランドについて全く述べていないのはその重要性からみて不可解である。ビルカとウプサラでのキリスト教徒の布教活動についてはキリスト教徒側の記録に依存しており、布教のための集団は陸路を通してそこに到達したものと考えられているから、ゴトランドを初めとするバルト海沿岸についての情報を欠いていたことと符合する。南岸のポーランドあたりまではフランク王国の側の資料が得られたと考えられるが、バルト海内部についての地理的情報が、sk126のスコーネからビルカまで帆走5日、そこからロシアまで同じく5日とする以外には、ほとんど信頼すべきものが無いことを考えるならば、アダムはバルト海については新しいことを何も記していないことになる。これは、アダムが情報源としたデンマーク人の勢力圏あるいは行動圏と情報の到達圏の限界を示すものに他ならないと考える。すなわち、当時既に独立の国家を形成し、次第にアトランティック・スカンディナヴィアを支配するデンマークとバルティック・スカンディナヴィアを支配するスウェーデンの構図が出来上がっていたことを反映するかもしれない。

デンマークについての記載はユラン半島、島嶼部、スコーネのいずれについてもほぼ信頼できるものがあり、記載の密度、正確度のいずれをとっても、スウェーデンやノルウェーに関する場合ははるかに凌いでいる。キリスト教がもっとも安定した力を維持していたのがデンマー

クであり、すでに西欧キリスト教世界に編入済みの部分であったと考えてよい。従って、デンマークに関する地理的情報はデンマーク側の情報と重ね合わせることでできるものをフランク王国側がすでに十分蓄積していたと考えられる。

ノルウェーに関する地理的記載は少なく、具体的な地名としては、オスロフィヨルド沿岸を示すヴィーケンと首都トロンネイムの二つに過ぎない。しかし、スウェーデンに関する記載もビルカ、ウプサラでの布教活動に関するものを除けば必ずしも多とは言えない。ノルウェーの場合はトロンネイムの教会について正確な情報をもたらしている。すなわち、キリスト教関係の記録を除けば、スウェーデンについてもノルウェーについても情報量に大差はないのである。

これに対し、大西洋北部に関する情報は注目すべきものが多い。ブリタンニア、オークニー、アイスランド、グリーンランドに関する記載は首肯できる内容が多いが、地理的位置関係に限って言えば、そこに認められる不正確さや曖昧さはむしろスカンディナヴィア半島についての知識の不正確さに由来する部分が大い。各島嶼の位置関係については記述に大きい矛盾がないことにこそ注目すべきである。

ヴィンランドに関する記載は、1000年頃と考えられるヴィンランド発見から僅か半世紀でこれを報じていたことになる。ヴィンランド発見、植民についてのアイスランドに残されたサーガの成立が13世紀のこととすれば、11世紀半ばにこの書が成立したことからすると、これが西欧世界に対するヴィンランドに関する第一報であったというべきである。この情報がデンマーク王エストリドソンから得られたことは前後の文脈から疑いをいれない。

このように検討してくれば、アダムの記載は明らかに島嶼にその重点が置かれており、原稿の北の島も案外著者の意図を正確に映したものである可能性がある。

キリスト教化された地域と異教のままに留まっている地域の間では、情報の量にも質にも大差があり、これはデンマーク人を情報源としていても同じである。アダムの関心そのものが、既にキリスト教化している地域、キリスト教化しつつある地域、異教の地域という分類に従ったものであることは確実である。観念的にはこれらは三重の構造をなしているといえるが、東では弱く、西に強いという方向性も、当時のフランク王国と主たる情報提供者であるデンマークの状況を反映している。

アダムの描いた北欧像はキリスト教化した北欧人の持っていた地域像を基礎にラテン的な知見を重ねたものである。

注

- 1) Nyberg, T. : Stad, Skrift och Stift. in *Adam av Bremen*. pp.302-307. STOCKHOLM, 1984
- 2) (1) Svenborg, E. スウェーデン訳 ADAM AV BREMEN. PROPRIUS FÖRLAG. STOCKHOLM 1984
- (2) Lund, Allan A. デンマーク訳 ADAM AF BREMEN, Beskrivelse af øerne i Norden. Wormianum. Højdjerg 1978.
- 3) 前掲 1) p.297.

- 4) アダム自身が、「博識のデンマーク王が、私に語った」という形で情報を示している。例えば、16、21章。
- 5) (1) タキツス：「ゲルマーニア」 田中秀央・泉井久之助訳、岩波文庫 昭和50年。
(2) カサエル：「ガリア戦記」 近山金次訳、岩波文庫 1976年。
- 6) 織田武雄：「地図の歴史」 p.39. 講談社 昭和48年。
- 7) 前掲 1) p.328.
- 8) 前掲 1) pp.329-330.
- 9) McEvedy, C. : The Penguin Atlas of Medieval History. p.60. Penguin books, 1961, Middlesex.
- 10) 前掲 1) P.312. その論拠は不明であるが、Capella, Jordanes, Solius, Beda 等の著者を挙げるのにタキツスを引用していない。異本中の一例で、skl 128には、Suevi をタキツスも sveones と呼ぶとしているが、これは後代の書き加えだとされる。
- 11) Karlson, S./Rosén : SVENSK HISTORIA 1 pp. 85-92. Bonniers, 1962 Stockholm.
- 12) 前掲 2) (2) pp. 8-9 .
- 13) 前掲 2) (1) p.309.
- 14) 前掲 2) (2) p. 9 . アダムはII-22で、ユムネについて、ヨーロッパで最大の都市で、スラヴ人以外の民族、ギリシャ人や barbarer が住むと記している。
- 15) 前掲 2) (1) barbariの概念の違いはスウェーデン語訳に際して、両様の語が用いられていることになる。de vilda folken と de ociviliserade folken で、常識的な邦訳としては、野蛮な民族および未開の民族となってしまう。
- 16) 前掲 5) (1) p.76. 他
- 17) アインハルトはカール大帝の伝記を書いているというが、その題名などは不明。
- 18) II-22でもオーデル河口のユムネ Jumne からロシアのノヴゴロトまで航行14日としているが、海上のみの航海でこの内陸都市に達するがごとき書き方で、バルト海の最奥部についての知識は不確実である。
- 19) 前掲 6)
- 20) 前掲 6) pp.58-59.
- 21) 31章 skl. 143.
- 22) VANHOJA SUOMEN KARTATO. P.17. Helsinki 1973.
- 23) Rimbert の Vita Anskarii 聖アンスガル伝はハンブルグ・ブレーメンの大司教であったリムベルトが前任者のアンスガルの伝記として著したものである。アンスガルの死後間もない865-876年の間に成立したとされる。ヴァイキング都市ビルカの布教活動と当時のビルカおよびスヴェア王国の状況を伝える資料である。Kumelin, K. : Rimberts Vita Anskarii の項参照。 *Kulturhistorisk Lexikon För Nordisk Medeltid (KHLNM)* 14.
- 24) 前掲 2) (2)では、1ローママイルは、1.5km. としているが、前掲1)(1)では、ヘルゴランド島についてのマイル表示がどれだけか正確には不明としている。
- 25) 谷口幸男訳 「アイスランドサガ」 P.64. エギルとソーロールヴのクールランド遠征」他。
- 26) Björnbo, A. A. : Adam af Bremens Nordens Opfattelse, Aarbøger for nordisk Oldkyndighet og Historie 24, 1909. 筆者未見。
- 27) この地図を提案するにあたって、著者は、陸行の場合、dagsrejse 一日の行程を45-65km と算定し、平均は約50kmとしている。航海では、一日、150-200km と設定している。Dagsrejse の項参照。KHLNM 2.

- 28) sk116で長さが不明としている。ノヴゴロッドが沿岸にあるかのように記す。
- 29) Kvämlandは現在の西部フィンランドと考える説もあるが、前述のエギルのサガによれば、Jämtlandの東に kvänland があるとするから、フィンランド西部、あるいは東部のカレリア地方である可能性もある。
- 30) 16章の Holm はおそらく Bornholm 島を指すと考えられるが、Gotland とする説もある。
- 31) 「グリーンランド人のサガ」によれば、ビャルニという男がアメリカ大陸を発見した可能性が示唆され、「赤毛のエリックのサガ」ではレイヴが1003年頃にヴィンランドに到達したと考えられる。
- 32) リベア山地の名は21、25、31、32、37の各章に見られるが、陸地の果てとして扱っているもので、この山地についての正確な情報はない。リベアという名もローマ人によるものと述べており(32)、新しい情報源が、これら山岳地帯についてはなはだ弱かったことを示している。